

(テントで)一泊(小屋で)二食!?

年明けの北アルプス。テントの中でガス・ストーブを囲んでいたら、「お食事を注文されたお客様、夕食の準備が整いましたのでカウンターまでおいでください」小屋からアナウンスが聞こえてきた。山小屋の宿泊客への案内なら、こんなに大きなボリュームは必要ないんじゃないか、と思っていたら、「今ね、テント山行で来ても、晩ごはんや朝ごはんを小屋で作ってもらうひとたちが増えてるんだって。お昼も弁当作ってもらって。で、寝るのはテントなのよ。だったら小屋泊まりにしたら? って思うんだけど、小屋は混むからゆっくりできないからテントなんだって。軽い荷物で、つまみと飲み物だけは担いでくる、そういう登山者、多いらしいよ」

そう仲間が教えてくれた。目が点になりかけたが、こういう登山者は今に始まったことではなく、無雪期のあちこちの山小屋でもけっこうあるらしい。ソコ天(おひとりさま用のテント)が増えるというのもこの延長線上なのだろう。

ちょうどいい位置に山小屋があって、そこまで2時間足らず。とはいえ、朝夕の食事も小屋頼み、ということになれば、テント以外の行動食とか非常食、飲料水やその他の生活用品・行動用具はどこまで考えられているんだろうか、途中で何か不測の事態が起きた場合にどう対処し、どう生き延びるか、という想像力は働いているのだろうか、と、少々心配になる。こんな心配をどうしたら解消できるんだろうか?

「行動判断」のプログラム

先日、東海ブロックの雪崩講習会が実施された。暮れから年明けにかけて雪不足に悩んだが、幸か不幸か、実施直前になって日本列島は大寒波に見舞われ、風雪や気温の低下に、「大丈夫かいな」と逆の心配をするほどの気象状況になった。

講習会後に開かれたコーチング・スタッフの反省会では、今回初めて取り入れた「行動判断」のプログラムについての意見が集中した。地図上に設定した目的地目指して、パーティーごとに周辺の尾根や沢筋を行動しながら、雪崩れやすいと考えられる地形を読み、どのようなコース取りをするか、危険があると予測されればどう動くか、などをメンバー同士で話し合い、確認しながら進んでいくことで、実践的な判断ができるようにしようというものだ。

「知ってほしいこと、教えたことはいっぱいあるけれど、限られた時間の中ではあれもこれも難しい。何をどう知ってもらうか、何を身につけるかももっと精選する必要がある」

「実際に使える知識と技術を立体的に組み立てることって大事ですね」

「雪層の観察とか、弱層のテストとか、ひとつひとつの基本的な知識や技

術を繰り返し見たり試したりすることは大事だけれど、それがどこで必要になるか、どう使うか、実際の行動の中で理解してもらうことができるか、というね。知識と技術がつながるのは大事だね」

「おまえならどこを通る? どうルートをとる、みたいな、ね。その理由というか、どうしてそう判断したか、という説明も必要になってくるし……」

「主体的に雪崩に対する判断をしながら行動していくことを学べるいいトレーニングになったんじゃないかな。みんな、面白がってやれるし、な」

「今の初心者たちって、ひとりのリーダーにわつついてっちゃうひとが多

くありません?」

「うん、それは話すときちょっと長くなるので、こっちに置いておいて……。基本的な知識や技術を学んだ受講生ひとりひとりが実際のフィールドに出て、受け身でなく、みんなが話し合っ、状況を確認して、判断を自分たちのものにしていけるようなシミュレーションはいいよね」

そんな内容だったのだが、こっちに置いておいた話を敷衍すると、基本ができていない(あるいは知らない)のに、この人についていったら行けちゃう、みたいな登山者も増えてきているのではないか、という話である。リー

私の登山

23

ワタシと登山

どんな山がやりたいんだ?

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

自分で考え判断できる登山者に

ダーとかガイドとか、と、初心者とか登山客。その間に位置する層がない。だから、冒頭のような、今までだったらちよつと考えられない登り方をする登山者も出てきて不思議はないのかもしれない。こういう発想は、今までの山ヤの「常識」みたいなところからは出てこない。反対に山ヤなら感じるはず(と思いたい)の不安もなさそうである。このひとたちは、果たして自分たちで、天候や時間をみて、出発するか停滞するかを決め、行動を開始したら、どの時点で進むか引き返すかなどの判断をしながら動いているのだろうか。

1月に発行されたある山岳雑誌に「山の遭難」が特集されている。昨今の登山者の山岳遭難の三大誘因として、体力不足、道迷い、楽観主義があげられ、山岳遭難救助の現場の事例や関連する話題などで分かりやすくまとめられ、読みやすく構成されているが、実はこの特集をほんとうに読んでもらいたい相手は、本など読まないひとたちなのではないか、という気がする。「登山は今や、それを行なう人によって、スポーツ、ゲーム、レジャー、ファッション、あるいはイベント

ントであり、その場所、季節、期間、人数やメンバーによってはおもしろい、目的、内容、装備、趣好などによって、さまざまな容姿を見せられる。関係する情報の量や質の差も著しいし、その入手方法も活用の仕方も千差万別(『明解日本登山史 エピソードで読む日本人の登山』(布川欣一著 2015年8月1日発行 ヤマケイ新書)という昨今、雑誌(この特集もそうだ

ろう)や書籍などの活字媒体で、またまった形で警鐘を鳴らしても、売れず読まれず、細切れの情報だけがネットに独り歩きし、私たちの思いもよらなかった登り方をするひとたちが増殖しつつあるように思える。

いま、これまで以上に登山者に継承されてきた登山の知識・技術をどう伝えるかは大きな課題だろう。それだけによけいに、実際の行動や体験の中で、教えられたり、感じさせられたり、自分たちで考えたり、仲間との社会的な関わりの中で判断を迫られたり、責任を負う立場になったりすること、ひとからひとへそれらが伝えられ蓄積して

鍋は鍋でもパスタ鍋
一定番から脱して……

鍋といってもコッフェルのことではない。山行前の献立の話である。「ホライさん、鶏、苦手ですか?」「え、あ、うん食べるよ」「献立、ナベでいいですか?」偏食の多い私に気を遣って聞いてくれたのだろう、その時の私には、鶏ナベかあ、くらいのイメージしかなかった。なにしろ、昔、「鶏ゴボウ鍋」の鶏肉抜き(肉を忘れてきたことがあるので、あまりいいイメージを持っていなかったのだ。しかし、テントで供された鍋にはそのイメージを大きく裏切られた。

まずスープはデミグラスソース仕立て。そこに馬鈴薯、ニンジン、玉ねぎなど下ごしらえしてきた野菜が入る。さらにチキンが加わって、ほどよく煮えたとこへ短時間でゆであがるペンネが入って出来上がり。盛り分けたらパルメジャーノチーズをかけて食する、という「鍋」だったが、なかなか美味で、体も気持ちも暖かくなる一品だった。

隣のテントにおすそ分けしたのだが、オッサンの感想は、「なかなかマカロニはうまかった」「マカロニって言うな、ペンネじゃ」と私のテントの女子が怒っていたが、ジェネレーション・ギャップもいいとこであった。

最近、山の献立も、定番から脱して、手を広げないと遅れそうだと、思い始めている。



厳冬期なのに、まだ雪は……(西穂山荘付近で)



「どうルートをとる?」(御岳にて)

ントであり、その場所、季節、期間、人数やメンバーによってはおもしろい、目的、内容、装備、趣好などによって、さまざまな容姿を見せられる。関係する情報の量や質の差も著しいし、その入手方法も活用の仕方も千差万別(『明解日本登山史 エピソードで読む日本人の登山』(布川欣一著 2015年8月1日発行 ヤマケイ新書)という昨今、雑誌(この特集もそうだ